（様式２－２）

Ⅰ　学校の概要

外国語教育推進モデル校事業　　高松市立古高松南小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	特別支援	全　校
４学級 １２３名	４学級 １１０名	４学級 １１８名	４学級 １２０名	４学級 １１２名	４学級 １１４名	７学級 ３３名	３１学級 ７３０名

○教員数　　３９名

◆学校の特色

本校では、学校教育目標として「心豊かに　自ら考え行動できる児童の育成」を掲げ、誰もが「学校は楽しい」と感じられる学校になるよう、教育活動に取り組んでいる。本校のめざしている児童像は、「自ら考え行動できる子、仲よく助け合える子、体をきたえ元気な子」である。素直で心優しい児童が多い反面、自尊感情や主体性がやや弱い。そこで、自己有用感や主体性が育つよう、主体的に学習に取り組む活動を重視するとともに、友だちとのかかわりを大切にし、互いに響き合いながら高めていける授業づくりに取り組んでいる。特に令和３年度からは、学級担任を中心として、児童が主体的に学び、他者と英語という言語を介してコミュニケーションを図る言語活動の充実をめざした外国語教育の実践研究を進めている。外国語教育を通して、なかまとともに、達成感があり、自信が深まる、ひいては誰もが楽しいと思える学校づくりをめざしている。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

響き合いながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

～全員が「したい」「聴きたい」「伝えたい」授業をめざして～

◆研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標である「心豊かに　自ら考え行動できる児童の育成」をめざし、現職教育の研究主題を「響き合いながら、主体的に学ぶ児童の育成　～全員が「したい」「聴きたい」「伝えたい」授業をめざして」として、研究を進めてきた。児童にとって、学習に主体的に取り組み、成就感を味わえることで自信を深められるような授業づくりが重要と考え、英語という言語を介して他者とコミュニケーションを図る学習活動を充実させることが必要だと考えている。そこで、学級の中で安心して自分の考えを発信できる支持的風土をもとに、全員が「したい」「聴きたい」「伝えたい」授業を行うことで、児童が相互にかかわり合い、「主体的・対話的で深い学び」ができる児童の育成につながるようにとの思いから、研究主題を「響き合いながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」とし、外国語教育の研究に取り組んでいる。

◆研究内容及び方法

仮説１　目的、場面、状況を明確にした必然性のある言語活動を行うことで、コミュニケーションを図る楽しさを感じることができ、コミュニケーション能力を高めることができるだろう。

仮説２　小学校６年間を見通した段階的な外国語教育を実践することで、外国語に親しみ、外国語習得への抵抗感を無くしながら、より意欲的に学習に取り組むことができるだろう。

仮説３　授業の中で言語活動や評価に ICT を効果的に活用することで、意欲を高め主体的に学ぶ学習活動が行えるだろう。

上記の仮説をもとに、研究を進めていく。

令和５年度香川県小学校教育研究会外国語部会研究発表会での提案発表に向けて、校内研究授業、教材研究、指導案検討を行い、授業をつくり上げていく。その過程で同学年の４学級がリレー式授業づくりにより、よりよい外国語授業へと実践研究を積み上げていく。検討に際しては、校内の研究体制のほかに、校外の指導者・協力者に助言、指導を仰ぐ。提案授業を行う学級や担当教員のみならず、学校全体の教員の指導力を高められるようにする。

香川県小学校教育研究会研究発表会では、本校の取組の提案、公開授業、研究討議等を行い、県下の先生方とともに研究を深める。

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

８　（児童アンケート）英語で自分のことや意見を話したり、聞いたりすることは好きですか。

指標　　「①好き＋②どちらかといえば好き」の合計

5月調査		目標値		11月調査
72.1%	→	90.0%	→	79.8%

指標の達成に向けた実践

(1)　「みなみっ子スタンダード」を意識した授業づくり

本校では全教科を通して、以下の３つを「みなみっ子スタンダード」として授業づくりを行っている。

①　全員が参加できる環境づくり

②　全員が自分ごととして学習を捉えられる場面（条件）設定

③　全員が成長を実感できる評価の工夫

みなみっ子スタンダード	研究の視点	
☆全員が参加できる環境づくり	・授業環境の継続の工夫 （クラスルームイングリッシュ・授業の流れ） ・イングリッシュルームの効果的な活用 ・朝の会や朝活での継続的な慣れ親しみの場の設定 ・スモールステップの授業展開 ・授業のＵＤ ・支援の工夫	ICT の効果的な活用
☆全員が自分ごととして学習を捉えられる場面（条件）設定	・単元構成や課題設定の工夫 ・「目的・場面・状況」が明確で必然性のある言語活動の開発 ・各時間での意味のある言語活動の積み上げ ・教材提示、発問の工夫 ・思考ツールの効果的な活用	
☆全員が成長を実感できる評価の工夫	・活動に活かす中間指導、自己評価、相互評価 ・評価規準の児童との共有 ・リフレクションシート（振り返り）の工夫 ・指導に活かす評価	

外国語教育においても、みなみっ子スタンダードの３点を踏まえた授業を本校の児童全員が受けられることを意識して授業改善を行ってきた。

⑵ 目的・場面・状況を明確にした言語活動

「目的・場面・状況」が明確で必然性のある言語活動を開発、設定すること、それを単元全体の中で位置付け、単元のゴールとして児童と共有することを大切に授業づくりを行ってきた。

３～６年生の単元の始めには単元のゴールに向けた単元計画を児童の思いに添って児童と共に立てていく時間を設け、児童が単元の目標に向かって見通しをもって活動できるように工夫した。各時間の言語活動と単元の目標やゴールとのつながりを意識できるように、意味のある言語活動の積み上げができるよう意識した。

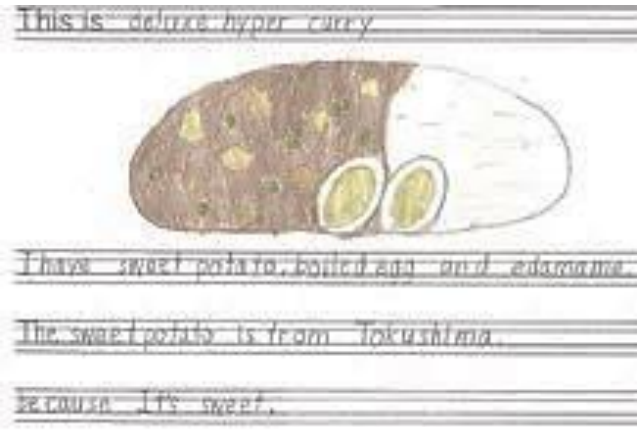
【各学年の実践例】

学年	単元のゴールとなる言語活動
１年	好きな動物を集めた「どうぶつランド」をつくって、プレゼント
２年	欲しい形を集めて窓にした、「世界に一つだけの家」づくり
３年	欲しい形を集めてつくった、グリーティングカード
４年	文房具を集めて友だちに贈る「ハピ文具セット」づくり
５年	「古ナビ」になって、自分たちのおすすめの場所へ案内
６年	日本のカレーの良さを伝える「My Best Curry」の紹介

【６年生の実践】

日本のカレーの良さを伝えるために、自分が考えるオリジナルカレーを紹介し合う活動を行った。単元のゴールとして、外国の先生方に伝えるという目的を児童と共有した。食材、産地、栄養素を伝え、その良さが効果的に伝わるように紹介する言語活動を設定した。

外国語の授業で紹介されたオリジナルカレーの内、多くの支持を得たオリジナルカレーは、後日、家庭科の調理実習のレシピに活用された。



児童のワークシートの例

各学年において、こうした充実した言語活動の積み重ねてきたことにより、英語で自分の思いや意見を話したり、聞いたりする楽しさを感じられる児童が増えた。

◆指標設定と達成に向けた取組

２　（児童アンケート）　英語で自分自身の考えや気持ちを伝え合うことができていますか。

指標　　「①できている＋②どちらかといえばできている」の合計

５月調査	→	目標値	→	11 月調査
60.0%		80.0%		71.4%

指標の達成に向けた実践

伝え合いたい思いがあっても、話せない、聞いても分からない状況があっては、英語で伝え合うことは難しい。それができている、どちらかといえばできていると感じている児童は６割であった。

言語活動の充実が必要と考え、言語活動を支える土台として、慣れ親しみの工夫、ICT の効果的な活用、コミュニケーションスキルを意識した授業づくり系統化等を行った。

(1)　慣れ親しみの工夫

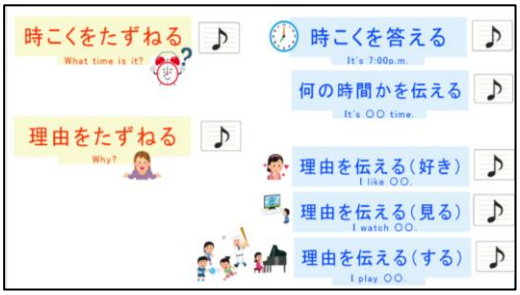
日常的に英語の音声に触れ、英語を話すことができるように、朝の会や朝の活動の時間に、継続的に英語に触れることができる時間を設定した。それが、毎朝の Short English Time(SET)と毎週火曜日の朝の活動の時間に行う Long English Time(LET) である。

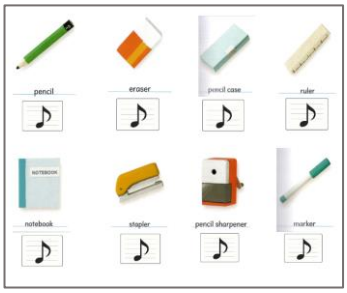
SET は朝の会の中で、児童が電子黒板を操作し、その時に学習している Unit に関連のあるチャンツや歌を言ったり歌ったりする時間である。

このような時間の積み重ねを継続的に行ってきたことで、英語の音声に慣れ親しみ、言語活動を行う際の抵抗感が軽減された。

(2)　ICT の効果的な活用

言語活動で使うデジタルワークシートの作成配布、録音された音声の再生、言語活動の様子の動画記録など ICT の活用を行ってきた。記録された音声や動画は、言語活動の改善につなげたり、成長の足跡をふり返ったりすることができた。





表現を確認する際に使う自作デジタル教材の例
音符マークをクリックすると音声を聞くことができる

自分の思いを表現した
デジタルワークシート

◆指標設定と達成に向けた取組

９　（教員アンケート）　コミュニケーションスキルを意識して英語でやり取りができていますか。

指標　　「①できている＋②どちらかといえばできている」の合計

５月調査	→	目標値	→	11 月調査
61.5%		90.0%		78.5%

指標の達成に向けた実践

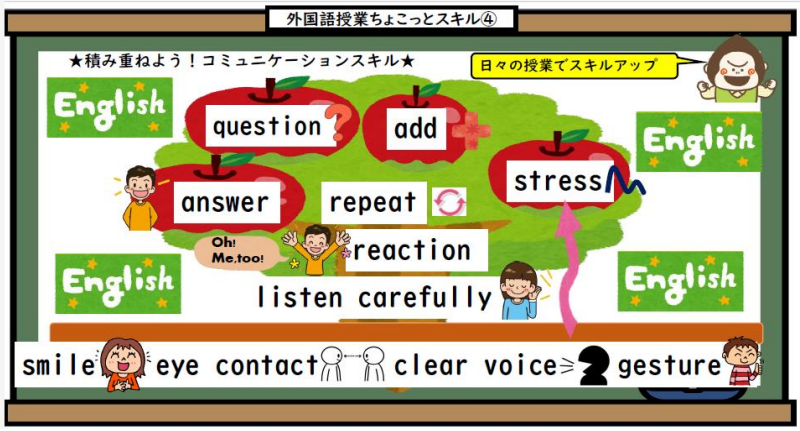
(1)　６年間を通したコミュニケーションスキルの「見える化」

英語でのコミュニケーションを充実させるために必要な１１のスキルを、学年の系統性を考えて図に示した。「見える化」することで、児童と教員がめざす姿を共有しながら活動を積み重ねることができるようにした。コミュニケーションスキルは１枚ごとにカードにし、黒板に示し、教員と児童が意識しながら活動を行っている。

高学年(実)

中学年(幹)

低学年(土の下)



(2)　教員の授業力の向上のために

専門性の高い外国語の授業をどの教員でも安心して実践できることをめざし、校内研究授業などで提案、討議された内容をもとに授業づくりの助けになるスキルを「ちょこっとスキル」として共有した。

教材の管理については、単元ごとにファスナー付きのファイルケースに入れ、団ごとのロッカーに保管したり、外国語の授業に関するデータや資料を「外国語教材」として、年度ごとのフォルダとは別に管理したりしている。

教師自身が授業力を高めるために、学年団みんなでつくる授業を意識した。提案授業では、本時の授業を同じ学年団の違うクラスで指導案通りに授業を行い、学年団の教員で修正をしていく「リレー式授業」を行った。やり取りの場の設定や資料提示の仕方、活動の流れなどの検討、修正を学年団ですることで研修を深め、学年団全員の授業力向上につながった。

リレー式授業

教員が自信をもって外国語の授業を行うには、教員自身も英語を話す機会を増やし、英語を話すことに慣れる必要があると考え、放課後に ALT と教員で英会話を楽しむ機会「ちょこっと英会話」を設けた。月に１度、20 分間程度の短時間、自由参加にすることで無理なく行うことができた。

ちょこっと英会話

英語のコミュニケーションを充実させるコミュニケーションスキルを児童と教員が意識し、日々の学習に取り組むことで、教員が自信をもって指導し、児童もコミュニケーションスキルを使って言語活動を行うことができるようになりつつある。

Ⅳ　研究の成果と課題

【成果】

○　継続的な慣れ親しみの場として、「Short English Time」、「Long English Time」を設定したことで、児童が自分の言いたいことを英語で表現する力がついた。

○　授業の始めや終わりの言葉、クラスルームイングリッシュ、授業の流れの板書掲示などのカードを各学級に配布し活用することで、教員の共通理解が図れた。児童にとっても定型の英語表現に慣れ親しみ英語の発話量が増えたり、授業の見通しをもてるようになったりした。

○　英語で豊かにコミュニケーションを図る児童の姿を具体的にイメージし、「コミュニケーションスキル」としてまとめることで、授業の中で意図的に「コミュニケーションスキル」を育てる活動を設けることができるようになった。児童にとっても少しずつ定着し、自分のめざす姿としてイメージしながら活動する姿が多く見られるようになった。

○　「目的・場面・状況」が明確で必然性のある言語活動について研究を進めてきたことで、児童の意識に沿った単元計画を、児童と共につくっていくスタイルが定着し自分ごととして学習を進めることができた。

○　デジタルワークシートの活用、デジタルデータの配布回収等、ICT を効果的に活用しながら指導を進められるようになり、児童も学習のツールとして活用できるようになってきた。

○　中間指導についての理解が深まることで、「言語活動→中間指導→言語活動」という学習の流れが定着し、視点を明確にした中間指導が展開されるようになった。児童は、やり取りを友だちと共に振り返り、自分の表現を広げたり深めたりすることができるようになった。

○　英語を使うこと、英語で表現することについてポジティブな回答をする児童が多くなり、外国や外国の人についての興味やかかわり合いたいという思いが高まった。

○　教員も、「ちょこっとスキル」、「ちょこっと英会話」、教材の一括管理など、授業づくりの知識や技術を高め、具体的な活動についての共通理解を図ることができた。苦手意識や抵抗感はまだあるが、少しずつ安心して授業づくりを行うことができるようになってきている。

○　「リレー式授業」を行い、学年団全教員で共に考え、試行錯誤しながら授業づくりをしていく過程を大切にすることで、授業力の向上につながった。クラスの実態に合わせながら授業を振り返り、改善していくことで、より児童の活動ややり取りが充実したものとなっていった。

【課題】

- 英語やコミュニケーションに苦手意識のある児童、言語の獲得に困難さを抱える児童への支援については十分とは言えない。個に応じた支援の内容や方法について ICT の効果的な活用を含めて考えていく必要がある。
- 英語の授業が好き、英語で自分の思いを伝え合うことが好きだと感じる児童が確実に増えているが、否定的に捉えている児童も一定数いる。友だちとのかかわりの中で学びを深める活動を充実させていく必要がある。
- 指導や支援に活かす評価、記録に残す評価について、それぞれの観点をどのような内容で評価するのか、具体的にどのような場面でどのような方法で評価するのかについては、まだまだ迷うことや不安に思うことあり、研究が必要である。
- 団で話し合いをして授業をつくり上げていく時間や、「ちょこっと英会話」などの教員のスキルアップのための時間は効果的だが、その時間を確保することが難しい。外国語の授業において活動内容の精選、効率化を図ることに加え、教育活動全体の見直しを行うなかで、本来の仕事である授業づくりに十分時間を使えるようにしていくことが必要である。
- どの学校のどの教員でもできる、持続可能な外国語の授業づくりを意識して研究してきたが、これまでの研究で積み上げてきたことを、改善しながら今後も継続していくことが重要である。